

研究雑話 (33)

フランスの障害者教育・福祉事情(十七)：諸結果(五)、生活のわざ、ものあり方、使い方。

藤井力夫

前回は、食事を楽しくが障害児教育の原点であったこと、また食事が生活のわざのものであること、これらについてお話ししました。もう一つフランスでの経験。遠出のとき、ゆでた人参をタッパーに入れてもって行き、それをみんなで食べる。おやつを買うことに慣れた我々。おやつ一つにもいろんな工夫、大人の知恵が必要。反省させられたしです。今回は、生活の知恵であり、生きる力、応用問題を解く力としての「ものあり方、使い方」、これをめぐってお話ししたい。

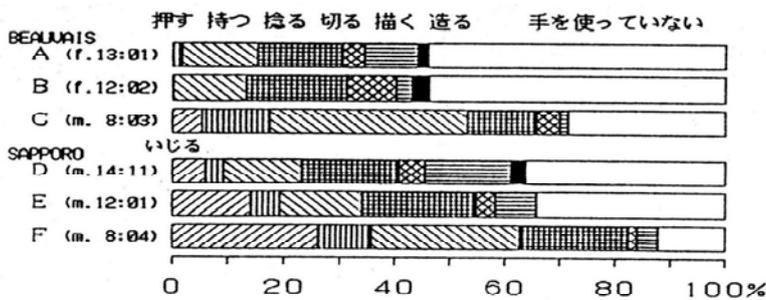
「手はつきでた大脳」。E.セガンのところで紹介しましたように発達段階から障害児教育は生活学習が基本です。図工、読み、書き、算の教科学習は生活のわざを確かなものにするため。その位置づけられて来ました。両者を結ぶもの、それはものあり方や使い方であり、用途をどれだけ応用できるかということです。食事づくりはこの意味で応用問題の最たるものなのです。

図Bは、ボーベ養護学校クラスAの中庸に位置する女の子(十三才一カ月)。諸結果(二)と同じ日のスナップ・リーディング。手の操作(E)、たたくから組立まで八つのカテゴリーに分け五分毎にプロット。Hは活動姿勢、Dのaは手伝い、作業、bは勉強に関するもの。朝の一時間は「生

活」で、町の体育施設の模型、陸上競技場やプールを製作。発砲スチロールや段ボール、木その他さまざまな素材を工夫して作る。鋏、カッターナイフ、のこぎり、使用する道具もいろいろ。各自のイメージで組立、修正。担当は二人の担任の内、すでに紹介した自転車のように関心を寄せている先生である。図Aは、一週間における手の使い方に関するリーディング結果、日仏比較。動きのあるときだけチェックしたので余白も多い。が、フランスの方がダイナミックな傾向がうかがわれる。たたいたり、いじったり、日本では手持ちぶたさといえる状態が結構多い。障害の重たさより座学の割合。これを反映しているように思う。

(北海道教育大学教授)

図A. 手の活動 (クラスの中庸に位置する児童生徒の学校生活一週間における割合)



図B. A. G (f 13.01 yrs old) 1985.11.26 (木) I.M.P. de BEAUVAIS

